

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標	実績	前年度実績*	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由
1 資料収集・保管活動	資料の計画的な収集・整理・保管ができていますか。	自然史系資料収集	中期的資料収集計画(別紙1)との整合性がとれているか。	概ね設定した収集計画に沿った活動は行っているが、いくつかの分野で達成度が停滞している(別紙1)。	概ね設定した収集計画に沿った活動が行えた。	C	・中期的資料収集計画に沿った活動は行っているが、5カ年計画の3年目にあたる令和5年度における各分野の達成率は20%～約52%にとどまっている。 ・タイプ標本を含む貴重な資料を寄贈いただくことができた。	C	・自然史系資料収集の達成率は低かったが、自然史・歴史系共に、収集方針に沿って資料収集を行った点は評価できる。タイプ標本(新種として記載する際の根拠となった標本)を寄贈されたことも評価できる。 ・資料のデータベース化も、課単位では達成率100%を超えている点は評価できる。
		自然史系資料登録	デジタルデータベース化状況 [設定目標値(別紙2)]	3,501点 (目標値: 3,464点)	2,629点 (3,699点)	B	・課全体では設定した目標を達成することができたが、4分野では目標を達成できなかった。	B	
		歴史系資料収集	資料収集方針(別紙3)に基づいた収集・保存ができていますか。	資料収集方針に基づいて収集が行えた。	資料収集方針に基づいて収集が行えた。	B	・寄託資料の寄贈への切り替え、特別展や企画展の開催を契機とする関係資料の収集、コレクションを補完する資料の収集などを適宜行うことができた。 ・数の少ない地元の中世文書や近世～近代の地方文書を購入することができた。 ・全体として、資料収集方針に基づく資料収集を行うことができた。	B	
		歴史系資料登録	登録(寄贈・寄託・購入手続終了)点数		527点 (1,571点)	B	・前年度実績を大きく上回ったが、受入手続きが完了しなかった資料群があった。	B	
	<総合>					B	・収集方針に沿って、学術的価値の高い資料や展示などに活用できる資料を収集することができた。一方、自然史資料に関しては、5カ年計画の達成率が低い状態にあった。 ・歴史資料の登録点数は前年度に比べ大きく増加しているが、自然史資料のデジタルデータベース化は多くの分野で目標を達成できなかった。	B	

評価基準 A: 大変良い、B: 概ね良い、C: やや不十分、D: 不十分

定量的な指標に関しては、主にA: ≥120%、B: 120～80%、C: 80～40%、D: ≤40% とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。

* 括弧内は前年度まで過去5年の平均。

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標	実績	前年度実績**	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由
2 調査研究活動	戦略的な調査研究を実施し、博物館の調査研究機能を高めることができるか。	研究業績	外部資金応募数・採択数 *令和5年度申請・採否決定分	申請24件 採択9件	申請15件 (22件) 採択 5件 (7件)	A	・学術振興会(科研費)とそれ以外の機関への外部資金の応募数は、前年度の約1.5倍であった。 ・研究代表者として申請した科研費の採択率は、27.3%であった。(学術振興会によると、令和5年度の主な研究種目の採択率は27.2%)	A	・普及書等執筆数は前年度比78%であったが、自然史・歴史系共に、外部研究費の獲得や学術雑誌などへの論文の掲載、学会発表といった研究活動を行っている点は評価できる。
			外部資金獲得による継続実施研究課題数 *令和5年度開始分を含む。	25件	26件 (20件)	B	・前年度と同程度の実施研究課題数であった。 ・研究代表者として実施した課題のうち6件は、コロナ禍のために研究期間を延長した課題であり、計画どおり実施できなかった研究も存在した。	B	
			自然史系 ・学術論文等出版数 ・学会発表数	出版27本* 発表27件*	出版28本* (31本) 発表27件 (27件)	B	・査読付論文を含め学術雑誌に掲載された論文数と学会発表数は、前年度と同程度であった。	B	
			歴史系 ・学術論文等出版数 ・学会発表数	出版9本 発表5件	出版8本 (7本) 発表5件 (2件)	B	・学術論文の出版数は、前年度より1本増加した(前年度の約1.3倍)。	B	
			普及書等執筆数	11本 自然史 8本 歴史 3本	14本 (15本) 自然史11本* 歴史3本	C	・執筆数は、前年度の78%にとどまった。	B	
	<総合>					B	・外部資金の申請数は前年度の約1.5倍と、積極的に行うことができた。 ・論文出版数や学会発表数は、前年度とほぼ同程度であった。	B	

評価基準 A: 大変良い、B: 概ね良い、C: やや不十分、D: 不十分

定量的な指標に関しては、主にA: ≥120%、B: 120~80%、C: 80~40%、D: ≤40% とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。

* 館長の実績を含む

** 括弧内は前年度まで過去5年の平均。

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標(括弧内は目標値)	実績	前年度実績*	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由	
3 展示活動	自然史、歴史に関する市民の興味関心を高めるとともに、質の高い魅力ある展示ができているか。	総入館者数	総入館者数	431,278	402,819人 (475,962人)	B	令和4年3月と令和5年12月に行った常設展のリニューアルによる効果のほか、「福岡県子ども美術館・博物館無料鑑賞事業」の効果もあり、総入館者数は前年度比107%となった。	B	・「有料特別展総観覧者数」の自己評価はCとされているが、特別展入場者数が前年度より減少した理由は、前年度の算定と異なり、観覧料を取らなかった冬の特別展の観覧者数が計数されていないことによるものであり、展示としては概ね十分であると評価できる。	
		特別展	有料特別展総観覧者数	有料特別展観覧者数 (野生のネコ科展の令和5年度分とカラズ展の令和5年度分を含む)	130,534	156,577人	C	前年度比約80%にとどまっている。冬の特別展「博物館のお正月展」が特別展料金を設定していないことが減少の1つとして考えられる。今後も魅力的な特別展の企画・開催に努め、有料入場者数の増を図っていく。		B
			春の特別展「世界の野生ネコ科展」	有意義で内容の充実した特別展を実施することができたか。 * 開催の意義と効果 * 入場者数	ネコ科動物の多様性や、ネコ科を中心とした生物のつながりを知る機会を提供した。また、ネコ科動物の保護に対する理解の深化を意図した展示を行った。(32,767人 / 全会期55,768人)	/	A	・現生ネコ科動物の多様性を紹介するため、40種の剥製や骨格標本を展示した。また、ネコ科動物が世界中に分布していることを直感的に理解してもらえるよう、3つの大陸(生息地域)にみたてたステージに標本を配置する島状展示を行った。 ・ネコ科動物のコミュニケーションの方法や、子育て、社会性についても知覚してもらうため、マーキング臭を嗅げるコーナーの設置や、マーキングの瞬間が記録された貴重な行動の動画展示などを行った。		A
			夏の特別展「恋するいきもの展」		動物の形の多彩さと不思議な行動を紹介するとともに、それら形や行動にはどのような意味があるのかを解説する展示を行った。(58,286人)		B	・動物の多様な形や不思議な行動がどのように繁殖に関与しているのかといった難しいテーマを中心に据え、わかりやすく興味を持って学んでもらえる展示となるよう挑戦した。この目標達成に向け、多彩な形をした大小様々な生物の実物標本に加え、不思議な行動が理解できる映像を多数展示した。 ・子供向け解説パネルを多数設置し、展示意図の理解および子供と保護者との対話の促進を図った。 ・目標とした来館者数に達しなかった。		B
			秋の特別展「なつかしい暮らしと道具展」		北九州市が誕生した昭和38年、高度経済成長の真ただ中に焦点を当て、それまでに培われた暮らしと、急激に変化する暮らしの両方を視野に入れ、道具と暮らしのうつりかわりを体験的・体感的に学ぶ展示を行った。(26,006人)		B	・市政60周年を記念し、高度経済成長に焦点を当て、新旧の道具に加えて、居室を再現し、写真や新聞資料、電化製品の普及率などのデータを組みあわせて、暮らしの変化を浮き彫りにすることができた。 ・居室の再現のほか、様々な道具の体験コーナーや蚕の飼育展示などをおこなって、体験的・体感的な展示会を実現できた。 ・学校団体や高齢者福祉施設との連携など、当初想定していた事業をあまり実施することができなかった。		B
			冬の特別展「博物館のお正月展」		干支にちなんだ生物や絵画や工芸品などの展示に加え、福岡県立八幡中央高等学校書道部による「龍」の作品を展示した。(47,180人)		B	・干支にちなんだ資料や史料の展示に加え、正月にまつわる文化や伝統行事に関する史料なども展示することができた。 ・福岡県立八幡中央高等学校書道部による干支の「龍」の作品を展示し、博学連携にも寄与することができた。		B
		歴史企画展「北九州市政60周年記念北九州市の誕生とその時代」	北九州五市の戦後復興や高度経済成長、北九州市誕生の経緯や60年の歩みについて、時代背景と合わせて紹介した。		/		/	/		/
		歴史企画展「白洲灯台150周年記念 岩松助左衛門と白洲灯台」	白洲灯台建設に尽力した岩松助左衛門の志と事績、同時期に建設された関門海峡周辺の灯台とその役割について紹介した。	/	/	/	/			

	企画展	歴史企画展 「小笠原騒動」	有意義で内容の充実した企画展を効果的に実施することができたか。	芝居と史実の両面から小笠原騒動の真相と戯曲化の過程に迫った。		B	周年や文化イベントなど、時宜に応じてテーマを設定し、収蔵資料を中心に、様々な内容の企画展を実施できた。	B
		歴史企画展「なつかしい暮らしと道具」		高度経済成長前後の衣食住の暮らしと道具を紹介した。				
	常設展示更新など	自然史ゾーン		外来種コーナーの情報更新や展示資料の変更・追加、生体展示コーナーにおける飼育生物の変更などを実施した。		B	<ul style="list-style-type: none"> ・外来種に関する問題は身近なものであることを知ってもらうため、関連情報を最新のものとするとともに、北九州市とより関連のある事例に焦点を絞った展示資料と解説の変更を行った。 ・定期的な展示更新が実施できたほか、映画をテーマにした展示など、新しい切り口での展示更新が実施できた。 	B
		歴史課ゾーン		中世史の展示替えを定期的におこなったほか、近現代史における映画のテーマ展などを実施した。				
	短期展示・出張展示など			館内での研究成果紹介や博物館活動の紹介のための出張展示などを行った。		B	<ul style="list-style-type: none"> 学芸員の研究成果の展示1回、季節を体感してもらうための展示1回、希少な生物を紹介する展示1回、博物館の展示と活動を紹介する出張展示2回を実施した。 	B
<総合>				B	<ul style="list-style-type: none"> ・特別展では、映像展示の活用や島状展示の導入など、展示テーマの正確な伝達や理解の深化、知覚の刺激を促すことなどにつながる手法を実践した。 ・企画展では、自然史や歴史に対する観覧者の興味関心を惹くテーマ設定ができた。 ・ただし、上記の展示手法や設定テーマの効果測定はできなかった。 	B		

評価基準 A: 大変良い、B: 概ね良い、C: やや不十分、D: 不十分

定量的な指標に関しては、主にA: $\geq 120\%$ 、B: $120 \sim 80\%$ 、C: $80 \sim 40\%$ 、D: $\leq 40\%$ とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。

* 括弧内は前年度まで過去5年の平均(令和2年度と3年度は除く)。

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標<括弧内は目標値>	実績	前年度実績*	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由
4 教育普及活動	博物館がセカンドスクールとして、子どもたちの来館機会を創出し、理科・社会科への学習意欲を持たせる仕組みづくりを進めているか。	セカンドスクール事業 (MT主務)	学校団体誘致活動回数<100社>	85社	107社	B	・前年度実績を下回ったが、目標値の85%は達している。	B	・年度途中のコロナ禍制限の緩和後においては、教育普及活動は順調に行われている。
			社会見学・修学旅行等 入館団体数 入館者数	903団体 54,265人	707団体 (1079団体) 41,022人 (70,427人)	A	・コロナ禍に伴う入館等の制限緩和により、団体数で前年度の128%、入館者数で132%に増加した。	A	
			体験プログラム等 実施回数 参加者数	134回 7,078人	125回 (135回) 6,176人 (6,434人)	B	・コロナ禍に伴う入館等の制限緩和により、実施回数で前年度の107%、参加者数で115%に増加した。	A	
	市民の知的ニーズに応じた効果的な生涯学習が実施できているか。	教育普及講座類 (学芸員主務)	館主催普及講座 開講数 参加者数	23講座 348人	17講座 (30講座) 255人 (915人)	A	・コロナ禍に伴う入館等の制限緩和により、講座数で前年度の135%、参加者数で136%に増加した。	A	
			特別展関連普及講座等 実施回数 参加者数	10回 3,717人	12回 (34回) 2,019人 (8,258人)	A	・特別展に関連したナイトミュージアム、講演会や学校団体に向けた展示解説を行った。回数は前年度より少ないが、参加者数は前年度の184%に増加した。	A	
<総合>						A	・コロナ禍に伴う入館等の制限緩和により、実施数・参加者数ともに回復・増加した。積極的な誘致活動をさらに行う必要がある。	A	

評価基準 A: 大変良い、B: 概ね良い、C: やや不十分、D: 不十分

定量的な指標に関しては、主にA: ≥120%、B: 120~80%、C: 80~40%、D: ≤40% とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。

* 括弧内は前年度まで過去5年の平均(令和2年度と3年度は除く)。なお、集計方法等が変更になった項目は数値を記していない。

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標	実績	前年度実績*	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由
5 広報・情報発信活動	多様な広報媒体を活用し、特別展をはじめ博物館活動の情報発信に努めているか。	特別展等博物館活動 広報・報道件数	広報・報道(市政記者クラブ)に情報提供した件数	7件	15件 (18件)	C	・前年度は開館20周年関連での投げ込みが複数あったことから、前年度と比較すると件数が少なくなっている。	C	・投げ込み記事の減少は、前年度が開館20周年であったため広報を強化したことによる反動と考えられ、情報発信活動は順調に行われていると判断した。 ・SNSのフォロワー数は過去5カ年平均値の140%に達しており、SNSの有効な活用ができていますと評価できる。
			広報・報道で取り上げられた件数	・新聞 延べ4紙 582件 ・雑誌等 延べ35誌 72件 ・テレビ 延べ7社 203件 ・ラジオ 延べ2社 43件 ・インターネット 延べ29社 57件	・新聞 延べ4紙 609件 ・雑誌等 延べ42誌 86件 ・テレビ 延べ9社 167件 ・ラジオ 延べ4社 86件 ・インターネット 延べ41社 65件	B	・前年度に引き続き常設展示のリニューアルなどを行ったため、報道で取り上げられた件数は、前年度とほぼ同数(約95%)であった。	B	
			ホームページアクセス数	595,948件	779,274件 (566,676件)	B	前年度からアクセス数が減少しているが、主な要因は令和4年11月までコロナ対策としてホームページからの事前予約制を行っていたことが影響していると考えられる。コロナ禍前(R元年度)のアクセス数が508,759件であることを考慮すると、R5年度の数値はSNS等の広報によりむしろ増加傾向にあると考えられる。	B	
			SNS(Twitter、Facebook、インスタグラム)での投稿件数・フォロワー数	771件 18,124人	729件 (539件) 16,983人	B	積極的に情報発信を行い、1,100人以上の新規のフォロワーを獲得できた。	B	
	<総合>					B	R4年度が開館20周年であったためマスコミ等に取り上げられる機会が多かったことから、R5年度は広報・報道の分野で件数が減少している。しかしながら、要所所での広報活動やSNSを積極的に活用、展開・SNSのフォロワー数の増加も見られることから、来館者数増につながっていると考えられ、一定の評価はできる。今後も一層の広報活動に努めていきたい。	B	

評価基準 A: 大変良い、B: 概ね良い、C: やや不十分、D: 不十分

定量的な指標に関しては、主にA: ≥120%、B: 120~80%、C: 80~40%、D: ≤40%とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。

* 括弧内は前年度まで過去5年の平均。なお、集計方法等が変更になった項目は数値を記していない。

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標	実績	前年度実績	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由
6 市民との協働	博物館ボランティア(シーダー)の参画により市民との協働による取り組みが進められているか	博物館ボランティア(シーダー)の活動支援	シーダー登録者数(50人)	41人	44人	B	活動が再開されたこともあり、登録者の大きな減少はなかった。	B	・活動参加者が増加し活気も戻ってきており、博物館活動における市民の力の有効利用ができています。
			延べ活動回数 (前年度:活動再開に向けた計画策定状況等)	1,377回	活動の一部再開 396回	A	5月8日より活動が全面再開され、各グループが本来の活動を実施できるようになった。日ごとにシーダー活動の参加者も増え活気も戻った。	A	
	友の会の活動を支援するなど、友の会と連携できているか。	「自然史友の会」の活動支援	研究部会活動・友の会主催活動支援状況	合同観察会や植物細密画講座などの自然史友の会主催行事の補助を実施した。	友の会活再開に向け、他施設から発出される様々な情報の提供や、友の会役員らの協議の補助を実施した。	A	会誌2号の発行や各研究部会が実施する例会34回、評議員会などの会議11回の補助などに加え、自然史友の会45周年記念事業の補助を実施した。	A	
		「歴史友の会」の活動支援	講演会 実施回数 参加者数	12回 978人	12回 958人	A	・講師の選定や交渉などに協力しながら、歴史・考古・古典文学など当初計画のとおり多彩な内容の講演会を実施することができた。	A	
			史跡めぐり 実施回数 参加者数	7回 179名	5回 138人	A	・当年度から新たに「学芸員と行く文化財ガイドツアー」の実施を開始し、新規入会を促進し、現会員の満足度を高めることができた。	A	
	<総合>						A	・シーダー活動と友の会活動のいずれにおいても、活動再開方針検討や再開後の活動補助を適宜実施し、活動参加者数が増加したとともに、参加者の活気も戻ってきた。	

評価基準 A: 大変良い、B: 概ね良い、C: やや不十分、D: 不十分

定量的な指標に関しては、主にA: ≥120%、B: 120～80%、C: 80～40%、D: ≤40% とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標(括弧内は目標値)	実績	前年度実績*	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由
7 社会貢献	学術研究機関として社会に貢献し、シンクタンク機能を果たすことができるか。	学術研究機関として、大学等外部機関への支援ができていますか	委員等就任 人数 件数	16人 106件	16人 (16人) 104件 (80件)	A	・大半の学芸員が委員に就任しており、参加委員人数も前年度とほぼ同様であったが、過去5年間の平均値に比べると、より多くの行政機関や学術団体への依頼に対応できた。	A	・外部機関からの講演依頼や委員就任依頼への対応状況などから、シンクタンク機能を果たしていると判断され、博物館として十分に社会貢献ができています。
			外部機関の依頼による講演などの対応回数	74件	77件 (60件)	B	・学校(小学校～大学)や市民団体、市の施設などの依頼に対し、前年度とほぼ同程度(前年度比約96%)の対応を行い、学校教育やさまざまな生涯学習に貢献できた。	B	
		資料貸出	資料貸出者(団体)数 貸出点数	60団体 806点	48団体 (64団体) 455点 (456点)	A	・他機関に貸出した資料は前年度の約1.8倍であり、研究活動と展示活動に係る資料借用依頼に真摯に対応できた。	A	
	<総合>				A	・外部機関からの講演や資料借用依頼などに対し、前年度同様あるいはそれ以上の対応ができており、博物館のシンクタンク機能を果たすことができた。	A		

評価基準 A: 大変良い、B: 概ね良い、C: やや不十分、D: 不十分

定量的な指標に関しては、主にA: ≥120%、B: 120～80%、C: 80～40%、D: ≤40% とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。

* 括弧内は前年度まで過去5年の平均。

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標	実績	前年度実績	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由
8 その他 北九州ミュージアムパーク創造事業	北九州ミュージアムパーク創造事業によって新たな取り組みが行えたか。	東田地区を北九州市の新たな賑わいづくりの拠点とするための事業の実施状況	博物館を軸に、東田地区を中心とする関係施設の連携を強化するための事業を実施できたか。	秋の特別展のほか、当館・スペースLABO・タカミヤ環境ミュージアムの3館で連携事業として「東田ミュージアムフェスタ2023」を開催した。	秋の特別展とそれに関連付けた東田三館連携企画展(SDGsが共通テーマ)を開催した。	B	・「東田ミュージアムフェスタ2023」と銘打ち、東田3館が一体となってイベント(講演や工作教室など)等を企画・実施したほか、「東田ミュージアムスタンプラリー」を開催するなど回遊性向上に努めた。その結果、スタンプラリーの参加者は約9,000人と施設間の回遊性向上の一助となった。	B	・自館の展示・イベントのみならず周辺他館との連携行事を有効に行うなど、北九州ミュージアムパーク創造事業を計画的に実施できている。 ・常設展の展示改装、デジタルアーカイブについては、事前に定めた「ねらい」以上の効果が得られたと判断した。
		当館が東田地区さらには北九州市の中核館となるための魅力向上を目指した事業の実施状況	常設展の展示改装を計画どおり実施できたか。 デジタルアーカイブ化事業を計画どおり実施できたか。	常設展改装工事とデジタルアーカイブ化事業を計画どおり実施できた。	常設展改装工事とデジタルアーカイブ化事業を計画どおり実施できた。	A	・常設展示の更新によって、新たな写真スポットが生まれ、また収蔵展示により容易に展示替えを行うことが可能な展示空間ができるなど、博物館の魅力が向上した。 ・デジタルアーカイブ化についても昨年度に引き続き、館収蔵資料の写真撮影を行うとともに、収蔵コレクションのデータベースを作成した。より魅力的な更新等ができた。	A	
	<総合>					A	・展示更新の業者選定ではプロポーザル方式を採用したことで、博物館側と業者との密な協議が可能となり、より魅力的な実施計画をつくり上げることができた。 ・秋の特別展開催のほか、東田地区の3館が連携したイベント等の事業、常設展の更新、デジタルアーカイブ事業など、重要な事業を計画通り実施できた。	A	

評価基準 A: 大変良い、B: 概ね良い、C: やや不十分、D: 不十分

定量的な指標に関しては、主にA: ≥120%、B: 120~80%、C: 80~40%、D: ≤40% とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。

評価項目	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由	意見
1 資料収集・保管活動	B	<ul style="list-style-type: none"> ・収集方針に沿って、学術的価値の高い資料や展示などに活用できる資料を収集することができた。一方、自然史資料に関しては、5カ年計画の達成率が低い状態にあった。 ・歴史資料の登録点数は前年度に比べ大きく増加しているが、自然史資料のデジタルデータベース化は多くの分野で目標を達成できなかった。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・自然史系資料収集の達成率は低かったが、自然史・歴史系共に、収集方針に沿って資料収集を行った点は評価できる。タイプ標本(新種として記載する際の根拠となった標本)を寄贈いただけていることも評価できる。 ・資料のデータベース化も、課単位では達成率100%を超えている点は評価できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「タイプ標本」の入手は、他の標本とは別に、数や分類群を記載しても良いと考える。 ・デジタルデータベース化は、国の方針でもあり、積極的に進めてもらいたい。
2 調査研究活動	B	<ul style="list-style-type: none"> ・外部資金の申請数は前年度の約1.5倍と、積極的に取り組むことができた。 ・論文出版数や学会発表数は、前年度とほぼ同程度であった。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・普及書等執筆数は前年度比78%であったが、自然史・歴史系共に、外部研究費の獲得や学術雑誌などへの論文の掲載、学会発表といった研究活動を行っている点は評価できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・研究活動が活発に行われていることは評価できる。
3 展示活動	B	<ul style="list-style-type: none"> ・特別展では、映像展示の活用や島状展示の導入など、展示テーマの正確な伝達や理解の深化、知覚の刺激を促すことなどにつながる手法を実践した。 ・企画展では、自然史や歴史に対する観覧者の興味関心を惹くテーマ設定ができた。 ・ただし、上記の展示手法や設定テーマの効果測定はできなかった。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・「有料特別展観覧者数」は自己評価ではCとされているが、特別展入場者数が前年度より減少した理由は、前年度と異なり観覧料を取らなかった冬の特別展の観覧者数が計数されていないことに起因するものであり、展示としては概ね十分であると評価できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・特別展の普及講座等「ナイトミュージアム」は特別展に関連したイベントの一つという扱いだが、別表にするなどしてまとめるとよい。令和5年5月に総理が主宰して全閣僚が出席した会議で決定された「新時代のインバウンド拡大アクションプラン」には「ナイトタイム等におけるコンテンツの充実」という中項目の下に「美術館・博物館の夜間開館等をはじめとした文化資源の活用」という小項目があり、国の施策として博物館の夜間開館が求められている。 ・学芸員の研究成果の展示は1回のみだったが、回数を増やすなどこのコーナーをもっと充実させるとよい(学芸員の負担が大きくなりすぎない範囲で)。 ・展示の「ねらい」と、その「ねらい」の達成度と、観覧者数を同じ項目で評価することはきびしい。観覧者数は、展示だけでなく、広報活動等の成果指標ともなる。総入館者数を「展示活動」の指標にすることが適当であるか、検討いただきたい。
4 教育普及活動	A	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍に伴う入館等の制限緩和により、実施数・参加者数ともに回復・増加した。積極的な誘致活動をさらに行う必要がある。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・年度途中のコロナ禍制限の緩和後においては、教育普及活動は順調に行われている。 	
5 広報・情報発信活動	B	<ul style="list-style-type: none"> ・R4年度が開館20周年であったためマスコミ等に取り上げられる機会が多かったことから、R5年度は広報・報道の分野で件数が減少している。しかしながら、要所要所での広報活動やSNSを積極的に活用、展開・SNSのフォロワー数の増加も見られることから、来館者数増につながっていると考えられ、一定の評価はできる。今後も一層の広報活動に努めていきたい。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・投げ込み記事の減少は前年度が開館20周年であったためと考えられ、情報発信活動は順調に行われていると判断した。 ・SNSのフォロワー数は過去5カ年平均値の140%に達しており、SNSの有効な活用ができておりと評価できる。 	
6 市民との協働	A	<ul style="list-style-type: none"> ・シーダー活動と友の会活動のいずれにおいても、活動再開方針検討や再開後の活動補助を適宜実施し、活動参加者数が増加したとともに、参加者の活気も戻ってきた。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・活動参加者が増加し活気も戻ってきており、博物館活動における市民の力の有効利用ができています。 	
7 社会貢献	A	<ul style="list-style-type: none"> ・外部機関からの講演や資料借用依頼などに対し、前年度同様あるいはそれ以上の対応ができており、博物館のシンクタンク機能を果たすことができた。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・外部機関からの講演依頼への対応状況などからシンクタンク機能を果たせていると判断され、博物館として十分に社会貢献ができています。 	
8 その他 北九州ミュージアムパーク創造事業	A	<ul style="list-style-type: none"> ・展示更新の業者選定ではプロポーザル方式を採用したことで、博物館側と業者との密な協議が可能となり、より魅力的な実施計画をつくり上げることができた。 ・秋の特別展開催のほか、東田地区の3館が連携したイベント等の事業、常設展の更新、デジタルアーカイブ事業など、重要な事業を計画通り実施できた。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・自館の展示・イベントのみならず周辺他館との連携行事を有効に行うなど、北九州ミュージアムパーク創造事業を実施できている。 ・常設展の展示改装、デジタルアーカイブについては、事前に定めた「ねらい」以上の効果が得られたと判断した。 	
総合評価	B	<ul style="list-style-type: none"> ・北九州ミュージアムパーク創造事業を活用し、常設展示の更新に取り組み、海外からの来館者にも楽しみながら日本の歴史や文化を知ってもらうための展示や、本市の生物多様性を身近な問題として理解してもらうための展示を構築することができた。 ・前年度に引き続き常設展のリニューアルを行ったことや、新型コロナウイルス感染症が5類に引き下げられたことなどにより、総入館者数は前年度比107%になった。 ・市民との協働の深化や博物館のシンクタンク機能強化に結びつく活動を実施することができた。 ・特別展や企画展の実施に際しては、様々な展示手法を試すことができたが、展示効果の測定は実施することができなかった。 ・資料の収取やデータベース化などの博物館活動の根底をなす業務の多くは、設定した目標を十分には達成することができなかった。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・全ての評価項目において概ね十分な活動が達成できており、博物館活動は全般的に順調に行われていると評価できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・評価指標について、他律的要素と自律的要素が混在しているように見受けられる。点検・評価から、諸活動の質の向上に資するフィードバックを得るには、他律的要素と自律的要素を峻別するなど、評価体系の見直しを検討してほしい。

評価基準 A: 大変良い, B: 概ね良い, C: やや不十分, D: 不十分